

# 学び合いを活性化し、児童の知識・理解を確実にする方法について

石崎 隆（新潟県上越市立春日小学校）

## 要約

本研究の目的は、次の2点である。第1は、学び合いが成立しても、知識・理解が維持されることを明らかにする。第2は、立ち歩きによって児童の知識・理解がどのように共有されていくかを明らかにする。その結果、次のことが明らかになった。

- (1) 2種類のテストにおいて、学び合いが成立しても知識・理解が維持される。記述で答える問題は、記号で答える問題より正答率が低い。
- (2) 立ち歩きの成立とともに、発言数が増加する。班で分からないことがあると、立ち歩きが起こり、他から得た新たな情報をもとに会話が進められる。

キーワード： 学び合い、知識・理解、立ち歩き、テスト

## 研究テーマ

学び合いの成立は、児童の知識・理解にどのような影響を与えるか

## 研究内容

### 1、研究の背景と目的

全国の教員を対象に、「教員の悩み」に関するアンケートの結果がある。学校の仕事の中で、教材研究等の時間がなく多忙である（全解答数の47.8%）。また、子供たちに接する際に、子供たちの変化に関する不安を抱いている（全解答数の37%）。その不安は、自分勝手（23.9%）、目的意識がない（19.5%）、子供たち同士の間関係の希薄化（11.3%）など学級経営における人間関係の確立の難しさを示している。

これらの悩みから知識・理解を確実にする学習改善を行う場合、授業を大幅に変更することなく、取り組めることが重要である。教師の児童に対する接し方を変化させることで、児童の人間関係と学習の効果の改善について述べられた論文がある。川合（1998）は、話し合い文化の学習効果について述べている。「実験授業の前後に認知面・情意面・コミュニケーション能力についての評価テストを行い、話し合い文化がそれらを高めることに効果があることを明らかにした。」また、「話し合い活動が学習に及ぼす効果として認知面・情意面・コミュニケーション能力についての評価テストを行った結果、認知面においては記述式のいわゆる思考力を要求する設問では効果が認められ、情意面においては、自己評価・他者評価が高まり、さらにコミュニケーション能力が向上するという結果になった。」と述べている。

川合が授業において改善したことは、

- ・ 話し合い活動ではお互いの判断だけではなく、その判断の根拠となる知識・経験をやり取りすることが大切であることを確認する。
- ・ 毎授業において、5分間のグループによる話し合い活動を行う。

である。

川合は、評価の方法として対象群と実験群を設けてテストの結果を比較した。しかし、先程の悩みの調査結果より多忙な学校生活の中では、対象群と実験群を設けて評価することは困難である。本研究では、多数の学校で実施されている業者テストで知識・理解が評価できると考える。そして、学び合いが成立し、知識・理解が維持されること、人間関係が改善されることが明らかになれば、教師の悩みについての解決方法の一つとして授業のやり方を見直すきっかけとなると考える。

そこで、本研究の目的を以下の2点とする。

- ・ 学び合いが成立しても、知識・理解が維持されることを明らかにする。
- ・ 立ち歩きによって、児童の知識・理解がどのように共有されていくかを明らかにする。

## 2、研究方法

本研究での知識・理解とは、ある事柄を覚えているかというものである。

(業者テストで点数となって表われるもの)

### <調査1>

対象 新潟県内A小学校 5学年 2クラス 64人

時期 平成14年9月上旬～11月上旬

調査単元 「流れる水のはたらき」「台風と天気の変化」東京書籍

調査目的 学び合いの成立と知識・理解の正答率の関係について明らかにする。

#### 1) 単元を通しての取組

<毎時間、最初の5分間に伝えること>

- ・相手意識の明確化

来年の新5年生の学習の出発点になる新聞を作る。

同じ学習をした、他クラスの友達に向けた発表会をする。

新聞を作る班で関川に見学に行く。

- ・単元の必修事項の明確化

授業の見通しをもたせることを目的に、ポイントを箇条書きにして毎回提示した。

- ・立ち歩きの承認

授業中に分からないことがあったら、自分の席を離れて相談に行ってよい。

- ・互いに比較し、評価の観点を検討

前日の授業の感想について、3段階の評価をして児童に返す。児童同士で比較する時間を確保する。

<分析1> 単元終了後に業者テストを行い、調査クラスと非調査クラスの正答率を比較する。  
また、全国平均正答率との比較をする。

<分析2> 調査クラスについて、記号で答える問題(記号問題)と記述で答える問題(記述問題)の正答率を比較する。

<分析3> 正答率が低い問題で問われている内容を学習した授業の会話から、立ち歩きによる情報の広がり立ち歩きの前後の会話から分析する。

## 現在行っていること

### 1、分析1の結果より

#### 1) 同学年によるテストの比較

文けい社のテストを用いて、調査クラス(A、B)、非調査クラス(C、D)のどのクラスも期待正答率(80%)以上である。

データ1 調査クラスと非調査クラスの得点、正答率の比較

調査クラス		
	表	裏
Aクラス	89.4(89.4%)	43.7(85.8%)
Bクラス	90.8(90.4%)	45.5(91.0%)
非調査クラス		
	表	裏
Cクラス	93.8(93.8%)	45.4(90.8%)
Dクラス	86.1(86.1%)	

2) 全国平均正答率との比較

新学社のテストを用いて、

表：A、Bクラス共に全国平均以上 裏：A、Bクラス共に全国平均以下

データ2 調査クラスの全国平均正答率

	表 得点	全国平均	差
Aクラス	82.7	82	0.7
Bクラス	82.4	82	0.4

  

	裏 得点	全国平均	差
Aクラス	33.7	41	-7.3
Bクラス	29.5	41	-11.5

2、分析2の結果より

1) 記号で答える問題(記号問題)、記述で答える問題(記述問題)について

新学社のテストを用いて

表 記号問題より記述問題の方が、全国平均以下の問題数が多い。

データ3 表:全国平均以下の問題数		
	記号問題 全14問	記述問題 全6問
Aクラス	3	4
Bクラス	3	6

  

データ4 裏:全国平均以下の問題数		
	記号問題 全0問	記述問題 全10問
Aクラス		6
Bクラス		9

裏 全国平均以下の記述問題の割合が高い。

2) 記号で答える問題(記号問題)、記述で答える問題(記述問題)について

文けい社のテストを用いて

・記述問題が記号問題よりも期待得点との点差が大きい。

データ5 表:期待得点以下の設問数(期待得点との点差の合計)

	記号問題 全9問	記述問題 全6問
Aクラス	2(-1.38点)	2(-28.9点)
Bクラス	2(-6.45点)	2(-24.8点)

データ6 裏:期待得点以下の設問数(期待得点との点差の合計)

	記号問題 全2問	記述問題 全3問
Aクラス	0	1(-4.1点)
Bクラス	0	0

### 3、分析3の結果より

正答率が低い記述問題を学習した授業に絞り、会話及び立ち歩きの行動を分析した。班の中では、立ち歩きが成立した方が、経験をもとにした会話が多く行われる。

#### 今後の課題

##### 1、今後取り組んでいくこと

- 1) 調査校の5年全クラスを対象に、もう一度調査時と同一のテストを行う。調査クラスと非調査クラスでの正答率が時間の経過に伴ってどのように変化したか分析する。そして、長期に学び合いをした調査クラスの方が、学習した内容を忘れにくいことを明らかにする。
- 2) 記述問題の誤答パターンと児童の情報の伝達との関係を、立ち歩前後の子どもの会話をもとに分析する。テストに誤答のパターンがあり、クラスの中で誤答が広がることで記述問題の正答率が低下したかどうかを明らかにする。

#### 引用文献・参考文献

- 1) 「教職員のなやみ調査<1998年2月>」, 創育社 P1183-1190, 教育アンケート調査年間1998年下, 1998
- 2) 川合 千尋:「小学生の理科学習における話し合い活動に関する研究」, 上越教育大学 大学院修士論文, 1998

